

初級・初中級学習者を対象とするリスニング授業 に対するシャドーイングの導入とその効果

平 尾 日出夫

Abstract

Limited introduction of shadowing into listening classes for introductory and pre-intermediate level students brought a favorable result in listening comprehension compared with regular listening classes where shadowing was not introduced. This result shows that as a training to enhance listening ability shadowing has an advantage over conventional method, even though the quality and the number of subjects in this study are very much limited and the implications of this study should be conditional. Further study on this area should be necessary.

I. はじめに

長らく同時通訳養成課程での訓練法として利用されていたシャドーイングが、近年英語教育の画期的学習法として注目を浴びるに至っている。このシャドーイングの効果についてはじめて英語教育の観点から光を当て、詳細に報告したのが、玉井（2005）であろう。これ以降多くの報告が、その効果についてなされるに至っている。例えば、氏木、他（2005）は、シャドーイングによって英文読解での理解度が向上することを報告している。さらに、倉本、他（2010a、b）は、それぞれのグループで行ったかなり大規模な検証から、シャドーイングが初級の学習者に対して音声認知の向上において効果があると報告している。ヒアリングをしながら同時にプロダクションを行うという、一見普通に考えれば通常とは言い難いような訓練が、なぜ学習効果を生むのかについての科学的な解明はまだ十二分にされているとは言い難い面がある（門田2007）。しかし、シャドーイングに必要とされる学生の集中力を考えれば、1時間の授業をすべてシャドーイングに割り当てることは、かえって疲労から逆効果を生む可能性も否定できない。英語の授業の中でどの程度の分量を、どのような形でシャドーイングに割り当てるのが効果的であるのかが課題となっている現状である（*ibid.*）。

本研究では、筆者が立命館大学政策科学部で行っている入学時に実施したTOEFL-ITPで約360点～440点のレベルの学生に対する英語リスニング授業で限定的なシャドーイングを導入し

たクラスとシャドーイングを行わないで授業を実施したクラスとの年度末時点での TOEFL-ITP の結果を比較するものである。

II. 被験者および授業の進め方

今回の実験の被験者は、2010 年度に立命館大学政策科学部に入学した新入生のうち、英語を選択した学生で、TOEFL-ITP で初級レベルに配属された 4 クラスの学生である。英語リスニングの授業である英語 101 (前期科目) と英語 104 (後期科目) を履修した 4 クラスのうち 2 クラスを実験群とし、2 クラスを統制群とした。

実験群、統制群ともに使用したテキストは、英宝社より刊行されている *Studying at an American University: VOA Special English Higher Education Report* である。実験群では、各ユニットの 2 週目に行う summery writing の学生による活動部分をシャドーイングに充当した。学生が、個別にシャドーイングを行う時間は約 15 分で、その後 3、4 名を指名し、原稿なしの状態で行ってもらい、そのパフォーマンスを評価した。学生の個別練習の際には、学生はスクリプトを参照できる状態となっている。1 年間に 12 ユニットの授業を行い、学生は 12 回のシャドーイング演習を行った。実験群の授業の進行の概略はつぎのフローチャートのとおりである。

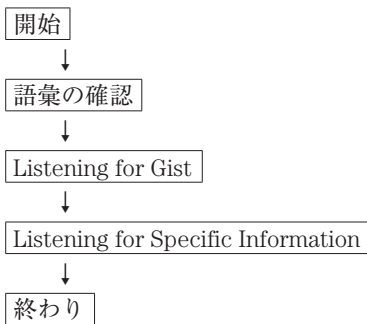


チャート 1: 各ユニット 1 回目の授業

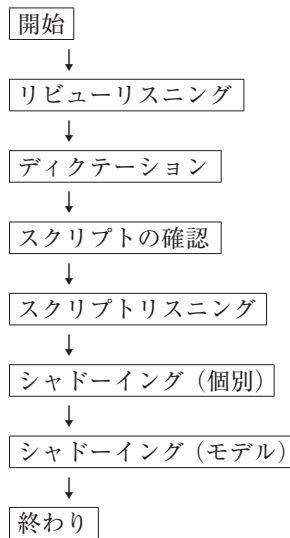


チャート 2: 各ユニット 2 回目の授業

Ⅲ. テストの結果

1. 基本統計量

2010年4月2日にクラス分けテストとして、また、2010年12月2日に学力検証テストとしてTOEFL-ITPを実施した。12月のテストでは、本年度から始まったカリキュラム改革の結果、後期からの1回生配当英語科目が選択科目に変更となった関係上、受験者数が4月の入学時に比べて半分以下に減少している。2回のテストの結果をまとめたのが次の表1である。

表1：4月と12月のテスト結果の基本統計量

実験群	4月	12月	統制群	4月	12月
学生数	65	32	学生数	65	32
Total Score			Total Score		
平均	398.42	418.34	平均	409.45	420.97
標準偏差	34.695	31.777	標準偏差	11.685	27.685
Section 1			Section 1		
平均	40.63	43.13	平均	42.40	43.28
標準偏差	4.495	2.893	標準偏差	3.579	3.343
Section 2			Section 2		
平均	38.11	41.34	平均	38.89	41.00
標準偏差	4.473	4.625	標準偏差	3.562	4.072
Section 3			Section 3		
平均	40.80	41.03	平均	41.55	42.00
標準偏差	5.677	5.391	標準偏差	4.319	3.927

4月と12月のデータでは、実験群、統制群ともすべての項目で平均点が上昇している。得点の上昇についての検定は次のセクションで行う。

2. 検定

それぞれのデータ間での平均値の検定を行った。母集団の均質性が必ずしも取れていないので、分散が等しくないと仮定したt-検定を行った。それぞれの結果は次のとおりである。

(1) 4月の実験群と統制群の検定

表 2 : 4月の実験群と統制群の総合得点の検定

	実験群	統制群
平均	398.4154	409.4462
分散	1203.747	136.5322
観測数	65	65
仮説平均との差異	0	
自由度	78	
t	-2.42921	
P (T<=t) 両側	0.017432	
t 境界値 両側	1.990847	

表 3 : 4月の実験群と統制群のリスニングセクションの検定

	実験群	統制群
平均	40.63077	42.4
分散	20.20529	12.80625
観測数	65	65
仮説平均との差異	0	
自由度	122	
t	-2.48261	
P (T<=t) 両側	0.014402	
t 境界値 両側	1.9796	

表 4 : 4月の実験群と統制群の文法・語彙セクションの検定

	実験群	統制群
平均	38.10769	38.89231
分散	20.00385	12.69135
観測数	65	65
仮説平均との差異	0	
自由度	122	
t	-1.1063	
P (T<=t) 両側	0.270775	
t 境界値 両側	1.9796	

表 5 : 4月の実験群と統制群のリーディングセクションの検定

	実験群	統制群
平均	40.8	41.55385
分散	32.225	18.65721
観測数	65	65
仮説平均との差異	0	
自由度	120	
t	-0.85203	
P (T<=t) 両側	0.395893	
t 境界値 両側	1.97993	

初級・初中級学習者を対象とするリスニング授業に対するシャドーイングの導入とその効果（平尾）

以上の結果から、4月の段階で実験群と統制群には、総合得点とリスニングセクションで、統制群の方が上回っていることが統計的に確認された。

(2) 12月の実験群と統制群の検定

表6：12月の実験群と統制群の総合得点の検定

	実験群	統制群
平均	418.3438	420.9688
分散	1009.781	766.4829
観測数	32	32
仮説平均との差異	0	
自由度	61	
t	-0.35233	
P (T<=t) 両側	0.725805	
t 境界値 両側	1.999624	

表7：12月の実験群と統制群のリスニングセクションの検定

	実験群	統制群
平均	43.125	43.28125
分散	8.370968	11.17641
観測数	32	32
仮説平均との差異	0	
自由度	61	
t	-0.19992	
P (T<=t) 両側	0.84221	
t 境界値 両側	1.999624	

表8：12月の実験群と統制群の文法・語彙セクションの検定

	実験群	統制群
平均	41.34375	41
分散	21.39415	16.58065
観測数	32	32
仮説平均との差異	0	
自由度	61	
t	0.315551	
P (T<=t) 両側	0.75342	
t 境界値 両側	1.999624	

表 9 : 12 月の実験群と統制群のリーディングセクションの検定

	実験群	統制群
平均	41.03125	42
分散	29.06351	15.41935
観測数	32	32
仮説平均との差異	0	
自由度	57	
t	-0.82166	
P (T<=t) 両側	0.414696	
t 境界値 両側	2.002465	

12 月の段階では、実験群と統制群の間にはいずれのセクションにおいても有意差は検出されなかった。

(3) 4 月と 12 月の検定

表 10 : 実験群の 4 月と 12 月の総合得点の検定

	4 月	12 月
平均	398.4154	418.3438
分散	1203.747	1009.781
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	67	
t	-2.81619	
P (T<=t) 両側	0.006378	
t 境界値 両側	1.996008	

表 11 : 実験群の 4 月と 12 月のリスニングセクションの検定

	4 月	12 月
平均	40.63077	43.125
分散	20.20529	8.370968
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	88	
t	-3.29663	
P (T<=t) 両側	0.001412	
t 境界値 両側	1.98729	

表 12：実験群の 4 月と 12 月の文法・語彙セクションの検定

	4 月	12 月
平均	38.10769	41.34375
分散	20.00385	21.39415
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	60	
t	-3.27507	
P (T<=t) 両側	0.001757	
t 境界値 両側	2.000298	

表 13：実験群の 4 月と 12 月のリーディングセクションの検定

	4 月	12 月
平均	40.8	41.03125
分散	32.225	29.06351
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	65	
t	-0.19516	
P (T<=t) 両側	0.845874	
t 境界値 両側	1.997138	

表 14：統制群の 4 月と 12 月の総合得点の検定

	4 月	12 月
平均	409.4462	420.9688
分散	136.5322	766.4829
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	37	
t	-2.25746	
P (T<=t) 両側	0.02997	
t 境界値 両側	2.026192	

表 15：統制群の 4 月と 12 月のリスニングセクションの検定

	4 月	12 月
平均	42.4	43.28125
分散	12.80625	11.17641
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	66	
t	-1.19231	
P (T<=t) 両側	0.237407	
t 境界値 両側	1.996564	

表 16：統制群の 4 月と 12 月の文法・語彙セクションの検定

	4 月	12 月
平均	38.89231	41
分散	12.69135	16.58065
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	55	
t	-2.49541	
P (T<=t) 両側	0.015611	
t 境界値 両側	2.004045	

表 17：統制群の 4 月と 12 月のリーディングセクションの検定

	4 月	12 月
平均	41.55385	42
分散	18.65721	15.41935
観測数	65	32
仮説平均との差異	0	
自由度	67	
t	-0.50881	
P (T<=t) 両側	0.612559	
t 境界値 両側	1.996008	

4 月と 12 月の平均点では、実験群において総合得点、リスニングセクション、文法・語彙セクションで極めて高い有意差が検出された。統制群においてもリスニングセクションを除いて同じセクションで有意差が検出されている。いずれの場合も、12 月の方が得点が上昇している。また、リーディングセクションでは、4 月と 12 月の結果に、実験群、統制群とも有意差は検出されていない。

3. 考察

4 月の段階では検出されたリスニングセクションでの実験群と統制群との有意差と、結果として検出された総合得点での有意差が、12 月の段階では解消されている。この意味で、2 週間に 1 回約 15 分のシャドーイングという限定的な導入にも関わらず、シャドーイングの導入が初級英語学習者の聴解力の向上により優位に働いたと推論できよう。

IV. 結語

今回の検証の結果は、倉本、他 (2010a, b) の初級学習者の聴解能力に対してシャドーイングが有利に働くという検証結果を補強しているといえる。ただし、通常の授業の中での検証であり、母集団の初期段階の不均一性や、検証実施機関のカリキュラム固有の問題から、後期に履修者が激減するなど、今回の結果の有効性は極めて限定的である。今後、さらに被験者の数を増大して実験を行うか、より統制された実験環境下での対照実験が必要であろう。

参考文献

- 氏木道人、他（2005）「『音声』を生かした効果的なリーディング指導を探る」JACET 関西支部秋季大会口頭発表資料.
- 門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』コスモビア.
- 倉本充子、他（2010a）「WBT 利用シャドーイング指導効果の検証—音声知覚力および英語理解力への影響」*Language Education & Technology* 第 47 号 pp. 93-111.
- .（2010b）“A General Overview of a Series of Studies on the EFL Instruction Methods ‘Reading Aloud’ and ‘Shadowing’ Utilizing the WBT System: the Impact of WBT Use”『外国語教育メディア学会 50 周年記念全国研究大会発表要綱』 pp. 174-75.
- 玉井健（2005）『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房.